

〔研究ノート〕

エンターテインメントによる都心部再生の試み

—モントリオール ‘Le Quartier des spectacles’ に関する事例研究—

榎戸 敬介

1. 本稿の背景と目的

20世紀末から今世紀にかけて、グローバル都市では観光、スポーツ、文化、フェスティバル、エンターテインメントなどの新しい都市経済が展開される Urban Entertainment District (以下、UED と呼ぶ) と呼ばれる空間の形成が、都市中心部の再活性化やグローバルな都市間競争力を強化するための基盤として自治体や国、ビジネス・コミュニティで認識されるようになってきている⁽¹⁾。東京においても、例えば東京駅を中心とする大手町・丸の内・有楽町地区の再開発にとって、このような新たな都市経済の促進が重要な課題とされている(榎戸 2018)。UED には多様なタイプがあり、また既存の UED の更新や新規の開発などダイナミックな展開を見せており、その実態と変化を把握することが、都市間競争力や都市生活の質を考える上で重要である。

本稿で取り上げる Le Quartier des spectacles(以下、QDS と呼ぶ) は、ケベック州モントリオール市の中心部に位置し、中心業務地区に隣接する約 1km² の台形の地区である(図 1)。公式の日本語訳はないが「ショー地区」あるいは「エンターテインメント地区」と訳すことが可能である。QDS はまた文化地区 (Cultural District) としても分類可能である⁽²⁾。本地区では 21 世紀初頭から開始された公園、広場、歩道などのパブリック・オープンスペースの再整備が進行中であり、エンターテインメントをテーマとする新たな都市活動の場として、またモントリオール中心部再生の核として機能することが期待されている。

QDS では、年間を通して複数の常設施設や屋外のパブリック・オープンスペースにおいてフェスティバル、コンサート、インスタレーション・アートやパフォーマンス・アートなど様々なイベントが開催されている。QDS の特筆すべき点は、複数のパブリック・オープンスペースを多様なエンターテインメントのための空間として計画的に再整備し、そのためのインフラストラクチャーを設置したことである。そして、さらに地区全体をエンターテインメント空間として機能させるための主体として Le Partenariat du Quartier des spectacles という非営利のパブリック・プライベート・パートナーシップ (以下、QDSP と呼ぶ) が、地元アーティストやメディア、行政など幅広い官民ステークホルダーにより設立されていることである。また、エンターテインメント地区としての完成度を高めるために、文化・芸術的価値を有する既存の建築物の改修や保全がなされていることも特徴的で

(1) UED については Hannigan (1998) が ‘Fantasy City’ と名づけてその 6 つの特性を示している。

(2) QDS は Global Cultural District Network という国際組織に参加している。https://gcdn.net/ 参照。

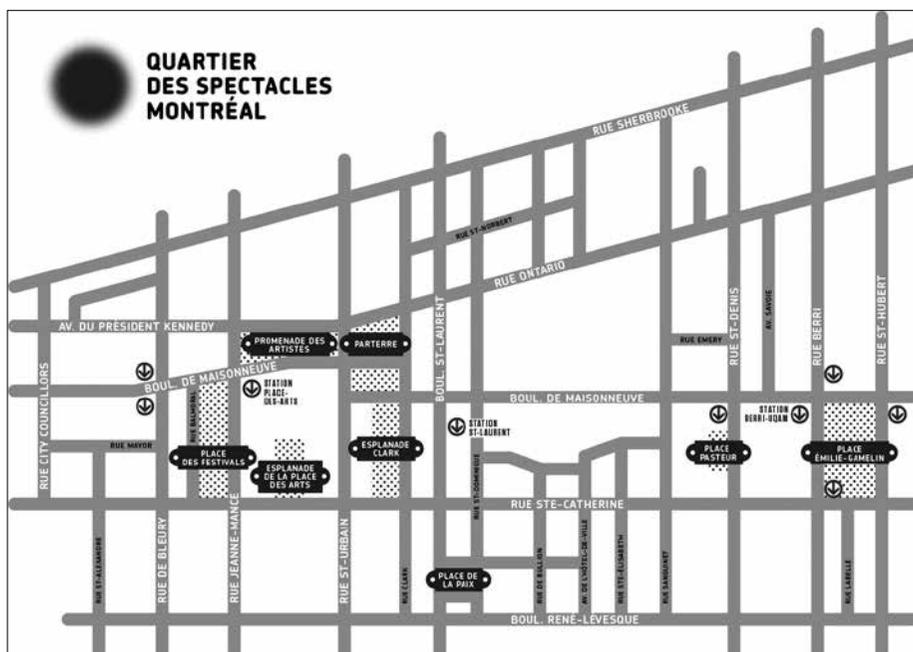


図1 Quartier des spectacles の地図
(Partenariat du Quartier des spectacles の地図を掲載)

ある。このように、QDSでは都市空間がエンターテインメントを目的として一体的に再デザインされるとともに、通年型のUEDとして機能させるための新しい組織が設置されており、空間計画と制度計画の両面から取り組みがなされていることが注目される。QDSはモントリオール市 (Ville de Montréal) の都市計画にとっても戦略的な優先事項であるが (Ville de Montreal, 2008)、ケベック州政府 (the Government of Quebec) そしてカナダ政府 (the Government of Canada) から支援されているという点で、広域的に重要なプロジェクトでもある。以上から本稿は、QDSをUEDのユニークな事例として認識し、現地踏査、インタビュー、文献調査により収集した情報を整理しその実態を明らかにすることで、UEDについてのより多角的な研究を推進しようとするものである。

2. QDSの空間特性

UEDという都市空間の一つのタイプとしてのQDSを理解するために、その基本的な空間構成要素である土地利用について以下に整理する。

1) 道路・歩行者空間

UEDでは人々が車から解放されて快適に歩き回ることが必要である。QDSでは公園、広場、歩道など各種の歩行者空間ネットワークが整備されているため地区全体を徒歩で安全に移動することができる。また、モントリオール市を特徴づける地下都市空間 La ville souterraine (英語では The underground city) につながる地下鉄駅が2駅QDS内に所在

し⁽³⁾、特に冬期あるいは悪天候時の移動を容易にしている。地上レベルでは、歴史的に重要な道路である Saint Catherine 通り (Rue-Sainte-Catherine) が地区の東西方向の中心軸となり、複数のパブリック・オープンスペースを相互に連結している。なお、QDSP の Maier 氏によれば、かつては Saint Catherine 通りと直交する道路の Boulevard Saint-Laurent という通りを境に、東側にフランス語系住民、西側に英語系住民が分かれて住んでおり、前者の方が比較的貧しかった、ということである⁽⁴⁾。現地を歩いてみると、東側は西側に比べて小規模なカフェやレストラン、クラブ、小売り店舗などが混在する質素でやや古びた商業地区となっており、一方で西側地区では大規模な開発が目立っており、土地利用が QDS の歴史性を示す要素となっていることが分かる。また、Boulevard Saint-Laurent 通りはメインストリートという意味の La Main (英語では The Main) というニックネームでも呼ばれ、同じく QDS の歴史性を示す重要な空間構成要素である。

この他にも、地区の東側に位置する Quartier Latin と呼ばれる歴史的文化的地区の中心軸である Rue Saint-Denis 通りなども含め、QDS は快適性に加え歴史性を感じる歩行空間のネットワークにより特徴づけられる。なお、UED は一つの地区としての空間的まとまりを持つものであり、その境界線として道路は重要な役割を果たすが、QDS においては台形の地区の下辺にあたる通りである Boulevard René-Lévesque と、上辺の Rue Sherbrook という幹線道路が明快な境界となっている。この2本の幹線に対し、台形を構成する残り2本の脚となる道路の幅員は狭く、あまり明確な境界を形成していない。その結果 QDS は道路によって明確に閉じられたイメージの空間とはなっていない。都市再開発プロジェクトにおいて開発地区の内側と外側の境界部分の空間デザインは、対象地区の排他性あるいは包含性に影響を与えるため重要な課題であるが、QDS は排他性が強い空間とはなっていないようである。

2) 街区

街区の規模や形状などはそこで提供されるエンターテインメントの種類や規模に影響を与えるものであり、UED にとって重要な要素である。UED としての QDS を象徴する建築物は Place des Arts と呼ばれる大規模な複合芸術・文化施設であるが、その街区は約 240m × 200m の長方形の大街区 (スーパーブロック) であり、その中にコンサートホール、オペラハウス、美術館がそれぞれ独立して立地し、アメニティ豊かな広場や歩行空間でネットワークされている。この街区の南側の境界となる Saint Catherine 通りをはさんでさらに南側の敷地は約 200m 四方のスーパーブロックであり、そこに民間の大規模複合商業施設である Complexe Desjardins が立地している (写真1)。この商業施設は Saint Catherine 通りに直結する形で物販・サービスのテナントに加えフードコートを設置しており、QDS の賑わいに貢献するとともに地下都市 (La ville souterraine) の核としても機能している。また、Place des Arts の北側にはケベック大学モントリオール校 (Université

(3) モントリオール地下鉄 (Métro de Montréal) の Station Places-des-Arts 駅と Station Berri-UQAM 駅。

(4) Le Partenariat du Quartier des spectacles のマーケティング/コミュニケーション・ディレクターである Alexandra Maier 氏へのインタビューによる (2018年9月12日実施)。本稿における Maier 氏の発言は、すべて同インタビューにおけるものである。

du Québec à Montréal. 以下, UQAM と呼ぶ) のキャンパスが約 200m×120m の長方形のスーパーブロックを占めている。なお, Place des Arts 側に建てられた校舎の壁面はプロジェクション・マッピングのスクリーンとしても使用されることがある。以上のように QDS 中心部の空間は連続するスーパーブロックの存在で特徴づけられる。QDS の他の部分は比較的小規模な敷地の連続で成り立っており, 人間的なスケールの街並みが形成されている。なお, これらのスーパーブロックは QDS 開始前から存在していたものであるが, UED としてより効果的に機能するように部分的に改修中である。改修後には QDS の性格がより明らかになるものと思われる。



写真1 Saint Catherine 通り沿いの Place des Arts(右側)と Complexe Desjardins(左側)

3. QDS 設立の経緯

テーマ性を基本とする UED の形成において, 地区固有の歴史と空間づくりとの関係は UED の性格を左右する重要な課題である。その典型的な事例としてニューヨーク市タイムズ・スクエアがある。タイムズ・スクエアでは歴史的に何の関係もなかったディズニーが同地区を新たな UED に変えている (Sagalyn 2001)。一方で, ボストン市のウォーターフロントでは地区固有の歴史と関連づけられた UED が形成されている。以下に, QDS と地区固有の歴史についてその概略を示す。

QDS の歴史について記した Thibert(2015) によれば, 第1次大戦末期には QDS の中心部にあたる Boulevard St-Laurent 通り周辺の地区には風俗地区 (Red Light District) があり, そこでは違法な酒場, キャバレー, 売春やギャンブルなどが行われていたが,

1950年代には同地区が衰退しはじめ、一方で専門的な劇場が増え始めた。特に重要な変化は、前述の Place des Arts が1963年に建設され、同地区に芸術活動の集中を引き起こした、とのことである。また、Deschênes(2018)によれば、現在の Place des Arts の前身となる第一次 Place des Arts とも呼ばれる地区が1947年から1954年まで存在していたが、そこにアーティストが集まる共同ワークショップがあり、共産主義についての議論がなされるような場ともなっていた。しかし1954年に衛生上の問題を理由にワークショップが閉鎖され、第二次となる現在の Place des Arts が当時の市長と地元ビジネス・コミュニティにより経済的エリート階級に向けて建設された、ということである。

QDSP の Maier 氏によれば、QDS は Place des Arts を含め劇場やコンサートホールその他の文化施設が既に集中していた地区を再編する形で地区設定がなされた、とのことである。同地区は、前述のようにもともとは高尚なエリート文化を中心とする地区ではなく、風俗地区としての性格も備えた地区であったが、そのような性格の違う空間を一つの地区として再編することが QDS を成立させる重要な課題であったといえる。

本地区独自の歴史の継承を行うひとつの手法として、QDS のトレードマークをかつての風俗地区をイメージする赤い丸 (Red Light) としている。実際に、現在でも継続して営業しているキャバレーやストリップ・クラブなどもあり、ナイトツアーの目的地ともなっている。それらの建物は大規模ではないが歴史的に価値があるものもあり、保存について議論がなされてきた。風俗地区という独特の歴史を編集して再提示し、危険がなく、健康的で楽しい地区にするという UED の手法が QDS にも適用されているが、一方で、風俗地区としての過去の歴史を守ろうとする動きもあることが注目される⁽⁵⁾。

QDS の形成の過程ではいくつかの建物が重要な役割を果たしている。例えば、Deschênes(2018)によれば、QDS を含むモンリオール市の中心部では繊維産業や印刷業が盛んであったが、1970年代にはそれらが衰退し、使用されていた建物が空くことで安価で広い空間が手に入るようになったという。そして、その中のビルの一つとして The Blumenthal Building と呼ばれる建物があり、当時、アーティストが運営する組織としてモンリオールで初めて設立された Vehicle Art が1979年に入居した。1980年代はじめにはその周辺のビルにもアーティストが入居しはじめ、1990年代にはアーティストの集中がピークとなった。しかし2000年になると同ビルが立地する敷地を入手したケベック不動産協会 (Société immobilière du Québec) により Vehicle Art は退去させられてアート活動の拠点が失われることとなった、ということである。

QDS ニュースレター⁽⁶⁾によれば、2003年から放置されていた同ビルをケベック州政府からの890万ドルの助成金をもとにモンリオール・ジャズフェスティバルの拠点とすることが2008年に決定された。歴史的建造物である同ビルの再利用は QDSP が本地区のリニューアルを象徴するものとして2003年より要望していたものであり、それが受け入れ

(5) Graham, Hughes. (2017年6月28日) Red-light tour takes trip into Montreal's racy past: City's 'flowing taps' during Prohibition fueled crime, gambling. The Canadian Press. 閲覧日: 2019年1月18日.

(6) Quartier des spectacles.(February 28, 2008) A New Vocation for the Blumenthal Building. <<https://www.quartierdesspectacles.com/en/blog/48/a-new-vocation-for-the-blumenthal-building#>> 閲覧日: 2019年1月10日.

られたわけである。

2003年はQDSPが結成された重要な年であるが、その経緯は以下のとおりである。QDSは、2002年に開催されたモンリオール・サミットにおいて、モンリオールの10大プロジェクトの一つとして位置づけられた。サミットではモンリオールを“Metropolis of creation and innovation open to the world”とする方策について話し合わせ、モンリオールが文化開発政策(cultural development policy)を採択するべきであるとの提案がなされ、その採択が2005年になされた。2006年にはモンリオールがUNESCO City of Designに指定されたが、それがモンリオールをCultural Metropolisとして世界的に認知させるものになると認識された。2007年にモンリオール市、ケベック州政府、カナダ政府などによりCultural Metropolisの促進を図るイベントであるRendez-vous November 2007-Montréal, Metropolis at the Palais des congrèsの開催をきっかけにQDSの西側地区の開発が宣言された。そしてモンリオール市都市計画であるThe Special Planning Program(SPP)の第1段階の開始としてQDSの開発が決定された。その資金的裏付けが、上記3者から提供されたそれぞれ4000万ドル、総額1億2000万ドルの公共投資である(Ville de Montreal, 2008)。その後、2011年にQDSの中核であるPlace des Artsの敷地内にモンリオール交響楽団ホール(Maison Symphonique de Montréal)が建設され、地区の文化性が更に高まった(Ville de Montreal, 2008)。

また、Deschênes(2018)によれば、モンリオールは100年以上もショーと文化の都市として知られるが、QDSの特筆すべき点は、これまで音楽や演劇などのショーは施設の中で行われてきたが、QDSでは屋外空間である道路もその舞台として使うようになった、とのことである。また、1980年代に開始され、すでに世界的に知られるイベントとなっているモンリオール・ジャズフェスティバルの創設者によれば、屋外空間がフェスティバル空間として使用されるようになったことが、QDSの前触れとなったということである。Thibert(2015)も、1980年代の中頃になって、モンリオール・ジャズフェスティバルが、地区全体に点在する空閑地を利用するようになった、と述べており、QDSの形成は、既存のイベント空間のインクリメンタルな変容の形態であると考えられるだろう。

QDSに立地するUQAMも変容しつつある。Thibert(2015)によれば、19世紀からの文化地区であるQuartier Latinに1980年代に開学したUQAMは、QDS形成を意識して地区中心部に存在していた古い建物やキャンパス内部空間のいくつかを修復した。また新しいパビリオンをいくつか建設したことで地区の文化的景観も変化していった。このような経緯から、QDSが文化産業の利害関係者によってゼロから創られたのではなく、風俗地区の歴史と連続する地区となることが意図されている、とのことである。

一方で、QDSPのMair氏は、地区周辺での家賃高騰により、これまで低家賃で生活していたアーティストたちが都心から少し離れた家賃の安いMile Endやさらに外側のMile EXなどの地区に移っているようだ、と言う。同氏によれば、アート活動だけで生活していけるアーティストは多くない、ということで、QDS開発に伴うジェントリフィケーションにより、家賃が上昇した都心部から郊外へアーティストが移っていくというサイクルに入っているようにも見える。

4. QDS の政策的位置づけ

QDS はモントリオール市のマスタープラン (Montreal Master Plan November 2004) により定義される行政上の計画単位である。同マスタープランは、QDS を文化創造・文化生産・イベントの場が集中する地区と位置づけている。このような文化活動の集中が同市の活気と都市イメージにとっての資産だとするが、一方で、それが住宅開発プロジェクトや公共空間デザインに様々な制約を加えていることが都市計画の課題だとしている。マスタープランは、QDS の全体的な質が、多くの空閑地と駐車場によって損なわれていることが問題であるとの認識にもとづき、そこでの開発は同地区における屋外イベントに対する要求や、公的なオープンスペースの保存に配慮したものであるべきとの方針を示している。要約すると、同マスタープランは QDS にとって住民と訪問者・旅行者のバランスのとれた存在が必要であるという認識を示している。

Thibert(2015) は、QDS の成立は、ケベック州におけるレコーディング、ショー、ビデオなど音楽産業を支えるために 1978 年に設立された非営利組織である Association québécoise de l'industrie du disque, du spectacle et de la vidéo (以下、ADISQ と呼ぶ) の調査をきっかけとするものである、とする。ADISQ は 2001 年に、モントリオール中心部東側を文化地区として再開発することを提案した。その提案は、ADISQ と Bernard Lamothe というコンサルタントとの話し合いの中から生まれ、QDS の実現につながっていった。その背景には、同地区が文化的活動の中心として長い歴史を持っていたが、ショー、フェスティバルやクラブなどに来る人々はまだいたものの、地区自体は歩き回るような雰囲気ではなくなっていたという状況がある。また、QDSP の Maier 氏も、特に買い物や劇場などの用事がなければ、地区の雰囲気を楽しむためだけに来る人はいなかった、と言う。

Thibert(2015) によれば、QDS がモントリオール市の公的プロジェクトとなるためには政治的なイニシアティブが必要であった。今世紀に入ってから当時の市長が地域の文化コミュニティ・グループに中心部の再活性化の提案を呼びかけ、それに対し、フェスティバル主催者やコンサート劇場の所有者などが再グループ化をはかり、非公式な形で連合を組んだ。その結果、文化コミュニティだけでなく都市再開発や観光開発の促進という点で、その連合と自治体の利害が一致しエンターテインメント地区としての QDS が政策的に承認されるに至り、2003 年に前述の QDSP も設立されることとなったのである。

5. QDS 内の主要な地区の特性

QDS を UED として機能させている主要な公共空間の特性についてその概要を以下に示す。

1) Place des Arts

Deschênes(2018) によれば、1963 年に建てられた Place des Arts とその周辺地区が QDS 立ち上げ段階での最優先事項だった。現在、Place des Arts は、Place des festivals と呼ばれる QDS を象徴するパブリック・オープンスペースをはじめとする複数のエン

ターテインメント空間に取り囲まれている。夏季は Place des Arts の正面アクセスともなる Saint Catherine 通りが車両通行止めとなるため、向いのスーパーブロックを占める複合商業施設の Complexe Desjardin と一体化して、多様な活動が展開されるステージ空間となる。来訪者にとっては Place des Arts 内の美術館やコンサートホールなどの施設に入場しなくても、屋外において多様なビジュアル・アートやパフォーマンス・アートを体験できる。沿道のカフェやレストランに加え Place des Arts の地下にもカフェや本屋などがあり、また地下でも Complexe Desjardin と連結されているので、特に地区外からの訪問者、旅行者にとっては滞留性の高い空間となっている。Place des Arts には高さのあるタワー状の建築物は存在しないためランドマーク性の高い地区とはなっていないが、Saint Catherine 通りの白い石ブロック舗装とそこでの人々の滞留が祝祭性のある独特の風景を生み出しており、非日常的な体験の場として機能していると言える。本地区の祝祭性をさらに高めているのは、隣接地区にある複数の建築物である。特に前述のモンリオール・ジャズフェスティバルの拠点となった The Blumenthal Building の Place des Arts に向いた壁面は夜間にはアート作品として演出される。なお、The Blumenthal Building に隣接する îlot Balmoral と呼ばれるデザイン性の高い建物が2018年に完成したが、QDSのシンボルカラーである赤色を壁面に大胆に使用した建物で、今後、QDS内のフラッグシップ・ビルディングとしてまたランドマークとして機能するものと思われる⁽⁷⁾。その最初のテナントとして、National Film Board が2019年の秋に入居する予定となっている。

2) Place des festivals

QDSを象徴するパブリック・オープンスペースとして、Place des Artsの西側に隣接して Place des festivals と呼ばれる約190m×40m、面積約7500㎡の広場が整備されている。この空間は、Place des Artsの北側に設けられた約200mのプロムナード状のアート空間である Promenade des Artistes を経て Place des Arts 東側に隣接する約90m×80mの Parterre du Quartier des spectacles と呼ばれる公園につながり、Place des Arts 南側の境界となる Saint Catherine 通りにつながる。その結果、Place des Arts の周囲がすべてエンターテインメント空間としてのパブリック・オープンスペースで囲まれた形になっている。Deschênes(2018)によれば Place des Arts はQDSの中核として、当初からベルト状にフェスティバル空間で囲まれるように計画されており、実際にその通りに整備されていることが分かる。

Place des festivals は屋外コンサートやアート・イベントの場として使われるが、筆者の観察によれば、それらが催されていない時には、少なくとも夏季であれば人々の散策や休憩の場としても気軽に使われており、都市中心部における貴重なアメニティ空間となっている。同地区の象徴は、高さ25mの4基の照明装置である(写真2)。この照明装置はQDSのために特別に制作されたもので、現地ではその形状から「歯ブラシ」とも呼ばれるユニークなデザインとなっている(Joel 2012:134)。「歯ブラシ」はさらに、大型のスピー

(7) Société d'Habitation et de Développement de Montréal. îlot Balmoral: Your new address at the heart of the Quartier Latin. <https://www.shdm.org/en/news/uqacs-ecole-nad-moving-to-ilot-balmoral/> 閲覧日: 2019年1月15日



写真2 Place des festivals の照明灯

カーやアート作品を吊り下げる装置としても機能する。広場の舗装面には人の動きに反応するカナダで最大のインタラクティブな噴水が235基埋め込まれている。また2つのレストランも広場の横に配置されている。

QDSPのMaier氏によれば、Place des festivalsでは電源やケーブルが地区内にネットワークされており、個々のイベント・プログラムに応じて自由に電力を得ることができるためイベント主催者は配線を気にすることなく効率良く仕事を進めることができる、ということである。また、Joel(2012:134)は、このようなインフラストラクチャーを‘メディア・インフラストラクチャー’と呼び、同地区が、物質的な構造物と非物質的なメディアイメージが合体する場所となっているとする。このPlace des festivalsは外見上は「歯ブラシ」以外には一見何の特徴もない平凡なオープン・スペースだが、エンターテインメントの実験的な空間として独自のものである。なお、Place des festivalsには座席はないが、敷地の片側が緩やかな傾斜地となっており、少し高みからイベントを見ることも可能である。本地区はまた、前述のThe Blumenthalとîlot Balmoralと道路をはさんで向かい合っており、両者のユニークな建築物を見て楽しめる眺望の場としても機能する。

3) Quartier Latin

Quartier Latinは前述のとおりQDSの東端に位置し、緩やかな坂道に沿って個性豊かなバーやレストラン、店舗が立ち並ぶ歴史のある文化地区であり、またモントリオールの多

文化性を象徴する地区でもある。Deschênes(2018)は、エンターテインメント地区として北米でも大変にユニークな地区であり、保存に値する場所である、と述べている。本地区はナイトライフとUCAMその他の大学生の存在をターゲットにしている。特に学生は訪問者全体の75%を占めるという。しかし本地区にはPlace des Artsその他が立地するQDSの西側地区ほど空き地は多くなく、そのため不動産開発にとっては西側地区ほどの魅力はない、ということである。実際にQuartier Latinの中心的な道路であるRue Saint-Denisを歩いてみると、レストランやバーその他各種店舗が隣接して続いており再開発の対象となるような敷地あるいは空闲地を沿道に見つけることはできなかった。

その一方で、Quartier Latinは筆者が1993年に訪れた時に比べると、全体に衰退してきているようにも見えた。UCAMの大学生でもあったDeschênes(2018)によれば、Rue Saint-Denis沿道で伝統的に開催されていたフェスティバルはPlace des Artsに移っていった、とのことである。また2012年の学生によるストライキが同地区の衰退に影響を及ぼした、という。しかし、2017年末には150の店舗のうち空きは14だけ、となっているとして、Quartier Latinの状況は良くなっている、とも述べる。同地区では大規模な施設の立地は無理だが、大学へのアクセス提供や、地下鉄駅による車利用の抑制、公共・民間敷地でのアートの促進など多様な役割を果たしている、とされる。QDS設置以前から独自の文化地区として存在していた同地区を、新たなUEDの枠組みで定義し直そうとする試みが興味深い。

4) UQAM

UQAMキャンパスはQDSのメインストリートであるSaint Catherine通りに面して立地している。業務や商業ビルに囲まれた都市型のキャンパスであり、QDSの重要な構成要素となっている。本地区にはその他にCégep du Vieux MontréalとINIS(The National Institute of Image and Sound)という高等教育機関が立地し、全体で約50,000人の学生が所在する。Deschênes(2018)によれば、UQAMはQDSの東側地区と西側地区にパビリオンを設置しており、さらに中心部のPlace des Arts地下鉄駅と直結するかたちで新しいパビリオンを建設し、QDSの文化性と賑わいを高めている、ということである。それはまた、長い間空闲地であった当該敷地(地下鉄駅上空の土地)の問題を解決するものでもあった、とのことである。UQAMは、さらに2018年にQuartier Latinキャンパスの改修を宣言した。その中心がPlace Pasteurと呼ばれる中庭である。改修は、屋外ファニチャーの取り換え、歩道の拡幅、植栽スペースや日当たりの良い場所の拡大などである。UQAMキャンパスのこのような改修は同大学が2019年に50周年を迎えることを記念したのものである。工事現場を観察すると、この中庭は、前面の車道・歩道と一体化したポケット・パークとして機能することがわかる。以上のように、QDSでは大学もUEDの形成に積極的な役割を果たしていることが注目される。

5) Jardins Gamelin

Jardins Gamelinと呼ばれる本地区は、住民や来訪者の多様な活動を可能にする公園としてQDSの重要な実験的プロジェクトとなっている。Jardins Gamelinは、もともとホームレスや精神障害者、麻薬売買人や使用者が集まる問題の場所であった。Semenak⁽⁸⁾によ

れば、本地区は一般市民が立ち寄る場所ではなかったが、市制 350 年を記念して公園として再整備された、とのことである。筆者の観察では、QDS 内のパブリック・スペースの中では最も散漫でインフォーマルな空間である。身の危険を感じるほどではないが、ドラッグを使用しているように見える若者グループや男性どうしのカップルなどの存在に印象づけられる。その一方で都市農園や屋外カフェでくつろぐ人々や、屋外卓球台で遊ぶ学生グループもあり、包含性の高い空間であることが分かる。

Maier 氏によると、QDSP に課せられた活動はパブリック・スペースの運営であるが、イベントの企画・運営すべてを包括的に行うのはこの公園だけであり、その意味で QDSP にとっては特別に重要な場所である。なお、QDSP は、市から委託される形で Pepiniere & Co. という非営利のアーバンデザイングループと Sentier Urbain という都市農業コレクティブの団体と協力しながら同地区で 5 月から 10 月までの間イベントを運営している。Semenak (2015) によれば、Jardins Gamelin のプログラミングを QDS のために担当した Pascale Daigle は、公園づくりの発想を、好ましくない人々を追い出そうと考えるのではなく、また、豪華なビルや派手なショーによるのではなく、幅広い人々のための活動によって場所を満たすこと、人々の新しい混合を生み出すこと、だとしている。安全性については、園芸家やそのボランティアが作業し、カフェで働くスタッフがおり、といったように仕事をする人々が常時存在することで犯罪を予防している。自転車警官の出入りも効果的であり、ジャズ音楽を流したり、パーティ用のライトをつけたりといった何気ないことも新しい雰囲気づくりに効果的だ、と述べている。以上のように、Jardins Gamelin は、排他ではなく包含という概念により安全で楽しい公共空間の実現を目指していることが特徴的である。

6. 今後の研究への示唆

本稿は QDS を、都市計画・デザイン、都市観光、都市経済などの研究対象として既に認知されている UED のユニークな事例としてとらえ、学術的な研究対象とするためにその実態の提示を試みた。QDS は、以下のとおり、今後の UED の研究についていくつかの新しい研究トピックを示唆している。

1) メディア／エンターテインメント・インフラストラクチャー

QDS を特徴づけているのは Place des festivals のイベント専用の照明灯や地下の電源設備など 'digital play ground' を機能させるためのメディア／エンターテインメント・インフラストラクチャーである。これまで UED の研究では、インフラストラクチャーとしては劇場やホテル、コンベンション施設など箱ものに注意が向けられていたが、QDS はさらに UED におけるマルチメディア技術の積極的な導入の重要性を示しており、今後の研究において注目されるべきトピックである。

(8) Semenak, Susan (updated Jun 27, 2015) Montreal Gazette "Jardins Gamelin: a rough spot gets a new look. 2019 January 13. <https://montrealgazette.com/life/jardins-gamelin-a-rough-spot-gets-a-new-look> 閲覧日: 2019 年 1 月 15 日.

2) UED 組織へのアーティストの参加

QDSではパブリック・プライベート・パートナーシップの形式で地区全体を企画・運営・管理する体制が確立されている。UEDのための組織づくり自体は特に珍しいことではないが、QDSではそこに地元アーティストが正規のメンバーとして立ち上げから参加していることが注目される。このアーティストの参加が、他のUEDと比較してどのような効果をもたらしているのかが重要な研究課題ともなり得るだろう。従来のBusiness Improvement Districtなどでよく見られる地元ビジネス・コミュニティや成長志向の地域政治家たちによるものとどのような違いが出るのか、今後の研究課題として有意義だと思われる。

3) 公共空間の排他性と包含性

QDSでは他のUEDと同じようにジェントリフィケーションの傾向が強まっており、都市中心部で創作活動をしていたアーティストたちが地区外に移り住まなくてはならない状況が発生している。しかし一方でJardins Gamelinに見られるように、社会的弱者を含め多様な人々を積極的にアートやフェスティバルの空間に呼び込もうという試みもQDS内ではなされている。このようにQDSは、UEDにおける排他性と包含性の問題についての理解を深めるための貴重な事例となるだろう。

4) 一時性の計画 (ephemera planning)

QDSはアート・イベントやフェスティバルなどを提供する空間づくり、仕組みづくりに関する一つの都市計画プロジェクトであるが、土地利用や建築物のコントロールあるいはインフラ整備など長期の都市変容に関わる伝統的な都市計画にはない計画論や計画技術の必要性を示唆している。そのような計画論・技術の必要性についてはSchuster(2001)がephemera planningとして概念化しており、QDSはその典型的な事例になるものと思われる。上記2)で示したアーティストの関わりが一つの研究対象として考えられる。

本稿は、QDSが都市計画・都市観光の観点からUED研究の新しい課題あるいは視点を提示する貴重な事例であることを確認した。2019年にはQDSにおける主要プロジェクトが完成し稼働開始するため、事例研究の題材としてはより適切なものになると思われる。したがって、QDSについての事例研究を完結させるためには、新たな文献資料の収集に加え、現地でのより詳細な一次情報の収集が今後必要である。

[参考文献]

- 榎戸敬介 (2018) 『視覚的消費を通じた都市開発—東京駅周辺地区のり・デザイン—』 千葉商大紀要 第55巻 第2号 (2018年3月)pp.15-26
- Deschênes, C.(2018) *Tous pour un : Quartier des spectacles Montréal*. Montréal: Les Éditions La Presse.
- Hannigan, J.(1998) *Fantasy City: Pleasure and profit in the postmodern metropolis*, London: Routledge.

- Joel, M.(2012) 'Spectacular infrastructure: The mediatic space of Montréal's 'Quartier des spectacles' *Public*, Volume 23, Number 45, June 2012, 128-138 (11).
Montréal Master Plan November 2004. Montréal.
- Sagalyn, L.B.(2001) *Times Square Roulette: Remaking the City Icon*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Shuster, J.M.(2001) Ephemera, Temporary Urbanism, and Imaging, in Vale, L. J. and Warner Jr. S.B.(eds) *Imaging the City: Continuing Struggles and New Directions*. New Brunswick: The Center for Urban Policy Research.
- Thibert, J.(2015) Une autobiographie (incomplète) du Quartier des spectacles, in Harel, S., Lussier, L. and Thibert, J. (eds) *Le Quartier des spectacles et le chantier de l'imaginaire montréalais*. Presses de l'Université Laval.
- Ville de Montreal.(2008) *The 2007 Rapport, Implementation of Montreal, Cultural Metropolis, Cultural Development Policy of Ville de Montreal 2005-2015*.

付記

本稿は、平成 29 年～ 32 年度科学研究費補助金による基礎研究 (C)「文化的消費主導の都市計画論：グローバル都市におけるエンクレーブの役割と意義」(研究代表者 榎戸敬介, 課題 ID 17878483) の成果の一部である。

(2019.1.28 受稿, 2019.3.8 受理)

—Abstract—

Montreal's *Le Quartier des spectacles* (QDS), which has been developed as a new center for cultural events and festivals, demonstrates an innovative approach to the formation of an Urban Entertainment District (UED). This QDS is a mixed-use district of one square kilometer adjacent to Montreal's central business district where public open spaces such as parks, plazas, and walkways have been redeveloped as sites for various cultural activities. The *Quartier* has also been a driving force behind the regeneration of the central area of Montreal. It is distinctive not only for its redesign of public open spaces, but also for the establishment of a public-private partnership involving local artists, media, and administrators, which brought the entire district together as a unified entertainment space. The QDS offers us a host of new topics for the study of UDE, including; 1) entertainment infrastructure, 2) participation of local artists in a UED organization, 3) exclusiveness and inclusiveness of public spaces, and 4) ephemera planning.